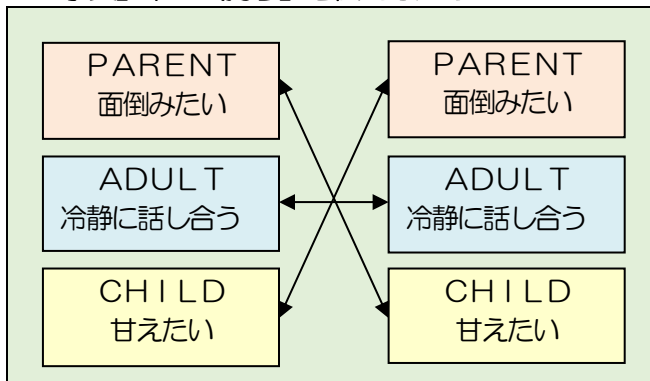


カウンセリング理論から、「会話」について述べます。お付き合いいただければ幸いです。

1 「事実」や「気持ち」を伝えるために



会話をするとき、こどもも大人も左記のように「P」「A」「C」の立場をとりながら行っているとされています。

会話の相手が、「P」の立場で話をしているときは、「C」の立場で応えていくのがいいようです。「A」の立場なら、「A」で。「C」の立場なら、「P」で…。

P ⇄ C A ⇄ A C ⇄ P

想像してみてください。こどもから、夕食前に「今日は、暑かったけえ、アイス食べてもええ？」と「C」の立場から話しかけられたら…。「ご飯の前に食べたら、ご飯が食べれんようになるよ。」と夕食を作りながらだと、「A」の立場をとって言いたくなります。時には、口調が強くなるかも知れません。そこを、「そうよねえ。食べたくなるよね。でも待つてね。夕食後にゆっくり食べようや。」と「P」の立場で応えていくとどうでしょうか？分かっているけどなかなかできない現実がありますが、相手の「立場」を見極めていくことから始めてみるといいかも知れません。

2 気になる言動があったとき

「なんでこんなことするん？」と思うことがあります。そのとき、

この行動には何か意味があるに違いない。

と捉えてみては…というのが「会話」を生み、「事実」や「気持ち」が伝わり合うとされています。

そして、会話を通じて、

何にどう立ち向かうのか。

という「自己決定」をこども自身に見つけさせていくことが大切だとされています。

してしまった気になること(悪いこと)を振り返り、そのときの自分の気持ちの有り様や立場を見つめ、「今度同じような場面に出会ったとき、どんな判断をしていかなくてはならないのか」ということが見つけられればいいのだと思います。